

歴博 くらしの植物苑だより

第106回くらしの植物苑観察会 1月26日(土)

炭と植物

吉村 郊子(国立歴史民俗博物館)

木炭とは、簡単にいえば木を蒸し焼きにしたものです。焚き火のようにただ木を焼く(燃やす)だけでは、粉々の灰になってしまいます(あるいは、せいぜい小さな消し炭ができるにすぎません)。

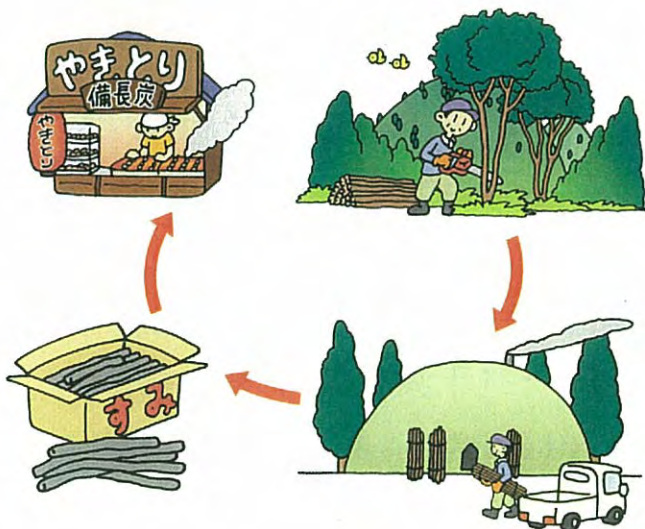
木炭には、その焼き方や原木の種類によって、さまざまなものがあります。焼き方は大別すると、「伏し焼き法」と「炭窯法」にわかれます。また、同じ炭窯法で焼いた木炭であっても、窯のかたちや製法の細かな点(消火や冷却の方法など)によって、「白炭」と「黒炭」があります。

たとえば、鰻の蒲焼や一部の焼き鳥店などで使われる「備長炭」は白炭ですし、一方、お茶炭として知られている「佐倉炭」や「池田炭」は黒炭です。白炭は黒炭よりも堅くて炭素を含む割合も大きいために、火力が強かつ長持ちします。

木炭の焼き方や種類

{ 伏し焼き法 炭窯法	{	白炭・・・備長炭(原木は、ウバメガシやアラカシなど)、研磨用の炭(ニホンアブラギリやホホノキなど)
		黒炭・・・佐倉炭、池田炭(原木はクヌギなど)、岩手炭(ナラなど)、花火用の炭(マツ、キリなど)

木炭ができるまで



国内の代表的な木炭生産地※

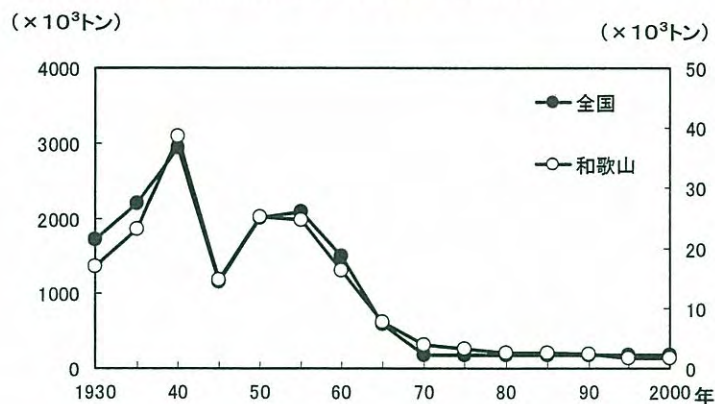
都道府県名	生産量	生産者数
岩手県	5,875トン	740人
北海道	4,819トン	—
和歌山県	1,795トン	219人
福島県	1,327トン	283人

※ここには、2000年の生産量第一位～四位の地域をあげた。数値は、林野庁経営課特用林産対策室『平成12年特用林産関係資料』による。

木炭には、燃料としての役割のほかに、その化学的あるいは物理的な性質（たとえば吸着性・多孔質性など）を利用した工業的な利用法があります（例：活性炭、冶金・精錬用など）。家庭では、かつては薪とともに燃料として広く使われていました。しかし、昭和30（1955）年ごろから、いわゆる「燃料革命」によって、薪炭は電気やガス、石油燃料（灯油など）にとって代わられるようになりました。現在では、木炭は野外でバーベキュー用の燃料としてときおり使われたり、あるいは燃料以外の用途に用いられていますが、その生産量は激減しました。

日本の木炭生産量の推移

（林野庁編『林業統計要覧』の数値をもとに作成）



木炭のさまざまな用途

- ・ 家庭内での利用
水道水の浄化、食品の保存、脱臭、除湿など
- ・ 住宅への利用
- ・ 水質浄化
- ・ 農業や園芸への利用（木酢液を含む）

家庭では、たとえば水道水や炊飯器に木炭（備長炭など）を入れたり、カビや結露の対策として木造住宅の床下に木炭やその粉を敷いて湿度を調整したりといった用いられ方があります。また、昨今では「木酢液」も利用されるようになりました。木酢液は、木炭を焼くときにでた煙を冷やして液体にしたもので、主成分である酢酸のほかに200種類あまりの成分を含んでいます。かつては嫌がられていた煙が、今日ではその特性が見直されて、消臭や土壌改良、病虫害予防などの目的で利用されるようになりました。現在では、4000トン以上が使用されています。農業や園芸では、木酢液は単独で使われるだけでなく、木炭と組み合わせて利用されることもあるようです。

この観察会では、白炭や黒炭、木酢液を実際にみながらこうしたお話をきいていただくとともに、備長炭の生産地を例にあげて、炭焼きさんが森林の伐採方法や利用サイクルを工夫して、里山をどのように利用・管理し、再生させているかという点についても触れてみたいと思います。

紀州備長炭を焼く（「窯だし」のようす）



次回予告

第107回くらしの植物苑観察会 2008年2月23日（土）

「浜のくらしと植物」 江口 誠一（千葉県立中央博物館）

13:30～15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料